

アンドレ・ブルトンの『ナジャ』における ファルスとファム・ファタルの問題 —異文化理解の一つの試みとしてダシール・ハメットの 『マルタの鷹』で『ナジャ』を読み解く—

加 藤 彰 彦

アンドレ・ブルトンの『ナジャ』においてブルトンが何を探求しているかの謎に答えるために、異文化理解の一つの試みとしてアメリカのハードボイルド小説の代表作として捉えられるダシール・ハメットの『マルタの鷹』を取り上げた。これらの作品が刊行された時期もほぼ同じであり、物語としての設定にも共通点が見られるが、まず何故このハードボイルド小説の視点を通して『ナジャ』の読解を試みるのかを明らかにした。その上で構成上確認しておくべき人物設定、共通して見られるエピソードの存在を指摘した。ブルトンにとって求めるものが何であるかを明らかにする方法として、最初にクロード・レヴィ＝ストロースの音韻論的方法を取り上げたが、そのような方法はなじまないことも明らかとなった。つまりブルトンの言う区別化différenciationは通常用いられている差異différenceともジャック・デリダの主張する差延différanceとも異なることを明らかにした上で、ジャック・ラカンが「カントとサド」で提示した相互性という概念で理解できる可能性を指摘した。その上で『マルタの鷹』の読解を通して、『ナジャ』における探求の対象としてファルスという名で呼ばれるシニフィアンではないかという示唆を得、『ナジャ』のテキストにおいてはシュルレアリスムのオブジェがそれにあたるのではないかと検討した。ただ『マルタの鷹』における黒い鳥のように明確なものとして提示できるのではなく、ラカンの言う対象aのように捉え難く浮遊するシニフィアンではないかという考えに至った。また『マルタの鷹』や『ナジャ』においてファム・ファタルとも言うべき女性が存在するが、物語に登場する女性は対象aではないこと、女性の欲望とは何かということ、更には欲望を肯定する第三者のまなざしについて触れ、女性を越えたところに成立する象徴的世界がブルトンの求めるものであることを明らかにした。その上で『ナジャ』においてナジャは探求の対象ではなく、ナジャという名前こそがその対象であると結論付けた。

キーワード：『マルタの鷹』、ファルス、ファム・ファタル、区別化、相互性、対象a

序章

アンドレ・ブルトンが『ナジャ』において10月4日から12日もしくは13日に至るまでの日記形式による記述を終えた後、「この死に物狂いの追求」(PI p.714)¹⁾と表現していることから、ナジャとの一連の関わりを一つの追求として捉えることは十分に可能なことである。そして物語の中において行なわれる追求ということになれば、我々は聖杯探求物語を想起しないわけに

はいかない。求めるものが人であれ物であれ、探求していく過程が物語を成立させることになる。またここにおいて注目すべきは、その過程において主人公は人間的にも成長するという教養小説的な側面も見出されるということである。このことはブルトンが『ナジャ』の本文を書き始めるにあたって「私とは誰か。」(PI p.647)という問いかけをすることとも符合するだろう。そしてこのような聖杯探求物語の現代版というべきものが、アメリカで生まれたハードボイルド探偵小説であると考えられるだろう。我々はこれから論を進めていく前に周辺の地ならしをまずしておきたいのだが、いわゆる探偵小説なるものがアメリカ人であるエドガー・アラン・ポーの1841年の『モルグ街の殺人』に始まったということ、そしてジャック・ラカンがそのポーの作品である『盗まれた手紙』について考察を加え、『エクリ』において『盗まれた手紙』についてのゼミナール」を記していることを確認しておきたい。またポーの作品はボードレールによって翻訳もされている。そしてこれが重要なことなのだが、この探偵小説が両大戦間においてヨーロッパで黄金時代を迎えると同時に、アメリカでハードボイルド探偵小説が生まれたという事実である。この論考においてそのハードボイルド小説の歴史を概観する余地はないし、評価を加えていこうという意図もないわけであるが、我々がブルトンの『ナジャ』を読み解くにあたって手がかりとしたのが、第一次世界大戦の直後にハードボイルド探偵小説の創始者となったダシール・ハメットの代表作と言われている『マルタの鷹』なのである。ハメットの長編第一作は『血の収穫』で1929年に刊行され、同年第二作の『デイン家の呪い』、そして翌年の1930年にこの第三作である『マルタの鷹』が発表されている。ちなみに『ナジャ』は1928年の刊行である。文学史的に見ておくならば、ハメットの同時代のアメリカの作家としてはF.スコット・フィッツジェラルド、ウィリアム・フォークナー、アーネスト・ヘミングウェイがいて、ある程度のイメージが形成されるだろう。我々がハードボイルド探偵小説に着目した一つの理由として、従来の探偵小説もしくは推理小説は謎解きに主眼が置かれていたが、このハードボイルド小説においてはむしろその謎解きはさほど重要な要素ではなく、私立探偵の行動や心情が重要視されている点が挙げられる。そしてこれも重要な点であるのだが、かつての聖杯探求物語において求められるべき聖杯というものはそれ自体力を持っていて価値ある存在なのであった。ところがハードボイルド小説において求められているものは、人であれ物であれ、当事者にとっては重要なものであるかもしれないのであるが、客観的な意味であるいはより正確に言うなら世間の価値基準に照らして考えるならば、さほど価値ある存在とも認識されないのである。一つの例として挙げるなら、同様にハードボイルド小説の代表作として捉えることのできるレイモンド・チャンドラーの『さらば愛しき人よ』においても、依頼者である刑務所帰りの大男にとっては素晴らしい女性であっても、実際のところはただの犯罪者にすぎない女性が探偵の探し求める人物なのである。この点についてはアラン・ロブ＝グリエが『消しゴム』においてその構図を明らかにしている。我々は何かを探し求めるということになると、その探し求められるものはそれ相応の価値を持っているという風に認識してしまうのであるが、必ずしもその必要はなく、ある意味当事者にとって価値があればそれで十分ということなのであり、このことは逆に見ていくなれば、日常生活においてとりたてて価値あるものとして捉えられているものではなくても、何かをきっかけとしてあるいはそれは事件であるかもしれ

ないのであるが、一変して意味ある存在となることがあるわけで、この点をロブ＝グリエは推理小説のような形式を借りて明らかにしたのであった。このことは世間一般に共通した価値あるものなど存在しないという、大戦を経たが故の価値観の崩壊といった事態も反映されているのかもしれない。例えばブルトンはニューヨークに亡命した後の1942年にエール大学で講演を行なっているのであるが、「両大戦間のシュルレアリスムの状況」と題されて、現在では『野の鍵』の中に収録されている記録の中には次のような発言がある。「ある戦争から別のものまで、絶えずシュルレアリスムの活動の原動力であったものは自由の情熱的な探索であると言うことができる。」(PIII p.719)「シュルレアリスムは戦争に応じて、私が言いたいのは——1919年から1938年まで——シュルレアリスムがそこから始まると同時にそこに帰ってくる戦争に応じてしか歴史的に理解され得ないという事実を私は強調する。」(PIII p.720)

以上のことから大よその時代背景が明らかになったと思われるが、時期的なことでもう少し細かい点にまで見ていくなら、ブルトンの『ナジャ』は既に記したように1928年に刊行されているのであるが、その中の中心部分であるナジャとの出会いを書いた「10月6日」の部分は、1928年の3月『シュルレアリスム革命』の11号に掲載されていて、またハメットが『マルタの鷹』を書こうとしていた時期も、ハメットが編集者に宛てた手紙から1928年の3月とわかっている²⁾。更にハメットは探偵小説において意識の流れを取り入れていきたい旨を明らかにしていて、これはブルトン自身が自らの自動記述がジェイムス・ジョイスの手法とは全く異なっていると明らかにしていることから、とりたてて論じる必要性もないと思われるのであるが、それなりの共通性、類似性はあると認められるだろう。このような点を踏まえて、我々はハメットの『マルタの鷹』を読んだ視点からブルトンの『ナジャ』を読み解いていくことを試みた。それがこの論考の目的である。その際次の三つの観点に注目している。まずハードボイルド小説に描かれる私立探偵の自意識とブルトンが『ナジャ』において問題にしているように思われる自己同一性との関連である。ブルトンがハードボイルド的であるということは一切なく、その共通性も指摘し得ないと思われるが、ハードボイルド的な視点を通すことによって、ブルトンの考えがより明確になるのではないかと思われる。次にそもそも何を探し求めているのかという問題である。『マルタの鷹』においては明らかであり、題名にもなっているマルタの鷹なのであるが、その点については精神分析的な解釈が可能となるだろう。一方『ナジャ』においてはどうか。まさに題名として記されている以上、ナジャを探し求めていた、あるいは探し求めていたのはナジャであったという表現も可能であるかのようにも思われるが、果たしてそうか。ブルトンが『ナジャ』の最後の部分においてナジャ本人を見失っていること、更には当時ブルトンにとってまさに理想の女性であったシュザンヌ・ミュザールを「君」という表現を用いて登場させていることから、ブルトンが探し求めていたのはナジャではなかったのではないかという推測もできるわけである。ナジャではなく別の女性、例えば「君」と言われる女性であったのか、あるいは『マルタの鷹』において設定されているように金銭面において価値のある物なのか、物であるとすれば具体的に何なのかということが問題として当然出てくるであろう。そして最後に両作品において登場する女性の存在であって、『ナジャ』においては断定することを避けるにしても、『マルタの鷹』において登場する女性たちのうち、事件の発端と

なり事件のまさに当事者として存在しているブリジッド・オショーンシーについては、私立探偵のサム・スペードが恋心を抱くにしても、あまり理想的な女性とは言い難い存在であり、この女性たちの存在を明らかにすることによって『ナジャ』におけるナジャがいかなる存在であったのかが明確になってくるであろう。

第一部 私のdifférenciation

第一章 主人公の人物設定

ハメットによって描かれた『マルタの鷹』の主人公であるハードボイルドの私立探偵がいかなる人物であるかについては明確であって、それはこのハードボイルド小説が成立する前提とも言えるべきものである。眼前で展開される現実をありのままに捉え、夢見ることなくそこで生活する自分自身をも見つめるということで、ここにおいてタフで非情とも言えるべきハードボイルド探偵が成立することになる。ハメット自身サム・スペードをそのように設定していて「金髪の悪魔」(MF p.3)といった形容で表現している。またモダン・ライブラリー版の『マルタの鷹』に付した序文において、ハメットはスペードのことを「抜け目なく策略好きの奴」(CN p.965)と表現していて、まさにハードボイルド小説の探偵といったところである。暴力に立ち向かうには暴力をもってするしかないという現実的な図式がここには見られるのであって、あまり善人とも思われない主人公が読者によって否定的に捉えられることなく受け入れられるのは、このような考えが前提としてある作者による正当化が存在するからである。もっともそれでもここにおいて一種の歯止めがかかるべきであるのは、レイモンド・チャンドラーによるフィリップ・マーロウの有名な台詞である「タフでなければ生きていけない、優しくなければ生きていく資格がない」³⁾がいかにハードボイルドの精神を表わしたものとして受け入れられていることにも表われている。このようにハードボイルド小説を成立させている主人公のタフで非情な人物設定がある意味必要不可欠であるとして、一方『ナジャ』を書いているブルトンについてはどのように言及することができるだろうか。例えばブルトンは『シュルレアリスム宣言』において文学における小説の氾濫について指摘しているのだが、中でも登場人物の性格設定については厳しく批判しているのだ。その内容は次のようなものである。「作者はある性格を攻撃し、そして、それが与えられると、彼の主人公に世の中を遍歴させる。何が起ころうと、この主人公は、その行動と反応は感嘆する程に予想されていて、彼が計算の対象である、その計算の裏をかくように見えて、その裏をかかないという義務がある。人生の波は彼を持ち上げ、転がし、沈めるように見えることもあるが、彼は常にこの作られた (下線原文) 人間の型に属するだろう。私が甚だ無関心になるただのチェスの勝負であり、人は、彼が何であれ、私には凡庸な相手である。(中略) スタンダールの主人公たちはこの作者の判断、多かれ少なかれ巧みで、彼らの名誉には何も付け加えることがない判断に支配されて崩壊する。我々が彼らを真に再び見出すところは、スタンダールが彼らを見失ったところだ。」(PI pp.315-316)

また同様の趣旨の内容は『ナジャ』の中にも見出せるのであって、ブルトンはユイスマンスを引き合いに出しながら次のように書いている。「これは言うておく必要があるが、知らない方がいゝ何らかの理由の必要のために、彼らのやり方で、彼らとは全く別の登場人物たちを演

出すと主張し肉体的、精神的にしっかり描いている小説の全ての経験主義者たちと、私は彼（ユイスマンス）を区別しているのだから。」（PI pp.650-651）

このように主張するブルトンなのであるから、『ナジャ』においてブルトン自らをある種の型にはめて提示するということは考えられないし、事実ブルトンはそのような提示の仕方をしていない。例えばブルトンは『ナジャ』の冒頭において「私とは誰か。」（PI p.647）という問いかけをするのであるが、それに対する解答を提示しようという気配も見られない。一方ブルトンはナジャについても「本当のナジャとは誰か」（PI p.716）という問いかけを自らに発するのであるが、その場合具体的にナジャについての具体像や解釈をいくつか提示してその中のどれが本当のナジャなのかという判断を下そうとするのである。その直後の話の展開から推測してブルトンはナジャについてのある種の結論というものを出しているように思われるが、そのような探求の方法をブルトンが自らに適用することはないかのように思われる。もっともブルトンは『ナジャ』の冒頭において「私とは誰か。」という問いかけをした後で、誰とつきあっているかがわかればその人がどんな人物であるかがわかるという趣旨の諺を持ち出してくるわけで、従って自らに問いかけるのではなく、まず自らのつきあう相手についての考察を優先させたのだと考えられなくもない。しかしそれでも最終的な結論には至らずとも、ナジャとの関わりを通して自らはどういう人物であるかのとりあえずの解答を提示することも出来たはずなのである。それが提示されないということはわからなかったということではなく、もともとブルトンにとってはそのような事柄は大した問題ではないという認識があったと考えるべきである。むしろ「私とは誰か。」という問いかけに対しては、別の捉え方が用意されていると考えるべきであろう。

第二章 二つのエピソード

『マルタの鷹』と『ナジャ』とは同列に論じること自体奇異にも思える程であるが、ただ構成上と言うべきかある共通点も見受けられるのであって、それは物語の展開上唐突とも思えるようなエピソードが主人公によって語られるということである。まず『マルタの鷹』について言えば、第七章においてスペードがカイロを待つ時間にブリジッド・オショネシーに対して語って聞かせるいわゆる「フリットクラフト」のエピソードである。これは数年前にスペードが担当した事件なのであるが、大よその内容は次のようなものである。タコマで不動産売買の事業を営み、幸せな家庭も持ち、成功したアメリカ人の生活にふさわしいものは全て持っていたフリットクラフトという男が、ある日突然失踪した。事件に巻き込まれたというのではなく、たまたま建築中のビルの近くを歩いていた時に、梁のような物が落ちてきて、彼には当たらなかったのだが、その時恐怖というよりも人生のからくりのようなものを感じ、衝撃を受けたのだ。自分の人生は善良な生活を送っているから保証されているのだというわけではなく、たまたま運命によって見過ごされていただけなのかもしれないという思いに駆られたのだ。そのこともあってそれまでの生活を捨て、全く別の土地に行って新たな生活を始めたのである。そしてそこでの生活は以前の生活と全く変わりのないものであったという。このエピソードは多くの人々の関心を引いたようで、様々に言及されている。ここで安易な結論を引き出すので

はないが、フリットクラフトという男が実際にはどういう人物であったかということとは別に変わらない何かというものを感ぜさせるだろう。そしてこのようなエピソードに匹敵するのが『ナジャ』において語られる「ドゥルイ氏」の話である。ドゥルイ氏は忘れっぽいために、フロントに鍵を預けながらも自分の部屋の番号を言うことができない。自分の名前を言って、その度に部屋の番号を覚えてもらわなければならない。ところがある時とても人間とは思えないような状態でフロントに現われ、ドゥルイ氏だと名乗るのである。この話はブルトンが「私とは誰か。」という問いかけを冒頭でしていることもあり、自己同一性の観点から語られることが多いのであるが、ブルトン自身理想の女性として捉えていた「君」にこの話を語り聞かせたいという欲求に駆られていたということも『マルタの鷹』の場合と類似しているだろう。そしてそのような状況とは別に、いわゆるどのような人かという観点から語られる人物像というものとは別に、その人にとっての本質というものが存在するように思われるのである。フリットクラフトの場合で言うと、人は状況が変わってもそう変わるものではないという語られ方もするだろうが、「ドゥルイ氏」の話においては時間も場所もそれ程大きく変わっているわけではない。むしろ大きく変わっているのは他人から見て明らかなその人の様子であって、どのような人であるかについてはこの点に注目されることが多いのである。そしてブルトンが投げかける「私とは誰か。」については、そのような視点は含まれていない。あるいはナジャについてはそのような視点は必要であったかもしれないのであるが、ブルトンにしてみればそのようなことは問題ではないのだ。ブルトン自身自分がどのような人物であるか、またどのような人物として見られているかについては自覚的であったに違いない。しかしそのような評価はそれとして、ブルトンの求めていた「私とは誰か。」についての解答はもっと別の形で提示されなければならないのである。

第三章 クロード・レヴィ＝ストロースの音韻論的方法

ブルトンがナジャとの関わりを10月4日から12日もしくは13日までの日記形式において記述した後ナジャとはいかなる存在であるのか自問するのであるが、その際ブルトンはとりえず二つの選択肢を示しそのいずれが本当のナジャであるのかと問いかけるのだ。具体的には次のように書かれている。「本当のナジャとは誰か、私にはわからない何か石の遺跡を探しに、フォンテーヌブローの森の中を、ある考古学者と一緒に、一晩中さまよったと私に断言している彼女なのか（中略）、私としてはこう言いたいのだが大いなるキマイラに投げかけられた全ての人間の質問の届く所である通りに、彼女にとって唯一の価値ある経験の場である通りにいることしか好きではなかった常に靈感を受けそして靈感を与える女性なのか、あるいは（何故そのことを認めないのか）時として、結局のところ他の人たちは彼女に声をかけることが許されていると信じていたし、彼女の中に全ての女性の中で最も貧しく最も不完全にしか守られていない女性しか見ることができないでいたために、身を持ち崩していた（下線原文）彼女なのか。」（PI p.716）

ブルトンにしてみればシュルレアリスム精神の具現化であるような存在のナジャに引かれたということも事実であろうが、いかにも娼婦といった面を否定し難い形で突き付けられてし

まっているということなのである。このいずれが本当のナジャなのか、あるいは更に別のナジャが存在するのかについては問題ではない。問題なのは、ナジャならナジャがいかなる人物であったのかを明らかにする方法とその内容なのである。つまりある特定の人物がいかなる存在であるかということを問題にする時、例えば外見なこと、性格、思想信条、更には経歴といったことを明らかにすることによってその人物を理解したとするのなら、それがいかに複雑ではあったとしても原則的には不可能な問題ではないのである。ここにおいて我々はレヴィ＝ストロースの音韻論的方法を持ち出してくることが出来る。今ある言語体系から離れて身体的物理的に発音し得る音というのは、無限ではないにしても数多くのものが可能ではないかと思われる。ところがある言語に特定してその音素を問題にすると、意外な程数少ない音素で成立することが明らかになったのである。ある言語音についてそれが母音か子音か、鼻音か非鼻音かといった二項対立的な問いを重ねていくと、12種類の組み合わせで世界中の全ての言語は網羅できることがわかっている。このように二項対立の組み合わせで全ての言語を把握することが出来るという言語学者による音韻論的方法是、レヴィ＝ストロースによって親族制度の分析に適用されることになる。そしてこのことは更に複雑で不可思議とも思える人の存在が、二項対立の組み合わせによって明らかにすることが出来るということの意味する。確かに人間存在というものは複雑で不可思議であると思いつつ、一方で実はそれ程難しい存在でもなく意外に単純なのではないかという思いには繋がるところがある。またレヴィ＝ストロースの親族構造に関しても、ある人物が誰かの子供であると同時に誰かの親でもありまた誰かの兄弟姉妹であるといういくつかの関係が存在しているために捉えることが難しくなっている面もあるが、逆に言えばこのような親族の基本構造を理解していれば、例えば親心とか兄弟愛とかいった内面的なことも既にあったものではなく、そのような親族構造の結果生まれてきたものとして理解することが出来るのである。このように考えるならば、仮に「私とはいかなる存在であるか」という問いを立てたとしても、無限ではないいくつかの項目についての二項対立を設定することによって、その人物像を明らかにすることが出来るわけである。ただこのことによって我々は全てを理解したとはい言切れないのであって、何かしらまだ残ったものがあるという感覚を拭い切れないのである。レヴィ＝ストロースの論法は何故そのような社会構造に至ったのかについて考えてみたところでわからないということであり、全ては社会的規範ありきの話なのである。レヴィ＝ストロースを読んでいなかったブルトンにしても、このような形での「私」についてはそれなりに解答を出すことが出来たに違いない。それが少なくとも『ナジャ』において示されていないということは、ブルトンにしてみれば別の形での「私」が問題だったのだ。従ってブルトンの問題についてのレヴィ＝ストロースの方法の適用には限界があるということ了我々はここにおいて示すことが出来たのであるが、ただ今後の論理の展開上有効と思われる点を予めレヴィ＝ストロースに学んでおこう。レヴィ＝ストロースによれば社会構造の起源や意味を問うことは不可能であるわけだが、ただ何故このような親族構造が成立することになったのかについては、レヴィ＝ストロースは一つの解答を用意しているのである。親族関係が成立するのは親族の仲がよいからというようなものではなく、親族が存在し続けるためにこそ親族関係が出来ているということなのである。そしてその親族が存在し続けるためには、世代ごと

に行なわれる反対給付ということが重要になるのである。これは何かを受け取った者は、それに対して何かをお返ししなければいけないというものである。それはそのような決まりになっているというよりも、社会に生きる者にとっての心理的負担から出てきたものなのである。もちろんお返ししてそれで終わりというわけではなく、更にお返しされた者がお返しするということになり、このような関係は果てしなく続くことになる。これは社会が進歩するとか発展するとかいう資本主義的な考えではなく、例えば自転車に乗って動かずに平衡状態を保つことは困難であるが、動き続けていれば倒れずに済むというのに似て、社会が崩壊しないため存在し続けるために動き続けなければならないということなのである。そしてこのことは社会という個人を越えた次元の話に留まることなく、個人の領域についても言えることであって、何か自分になくて欲しいものがあった場合、それは必然的に他の人からもらうしかないのであるが、もらってばかりという不均衡な状態ではいずれ限界が見えてくるということで、贈与と返礼という動きが成立するような状態を維持していなければならない。常に何かを与えているということであれば、いずれ与えるものがなくなってしまうという状態になることが予想されるわけであるから、返礼も期待しなければならないのであるが、それは何も自分が贈与した当の相手からというわけでもないのである。贈与した相手とは別の人から返礼を受け取るという、いわば循環的な構造にもなっているのである。このような仕組みが社会が存在し続けることの前提であると考えらるなら、社会が存在し続けるためにも果たさなければならない義務であると同時に、個人的な領域においてもまず与えるということをしなければ、社会が存在し続けることが出来なくなると同時に、自分自身の存在も危うくなるということなのである。このように考えるならば、レヴィ＝ストロースの方法をもってしてブルトンの言う「私とは誰か。」に答えることは出来ないということがわかる。つまりいくら情報めいた内容を提示したところで、それで全てわかったということにはならないのである。従って我々はレヴィ＝ストロースとは違った方法を用いてブルトンの問いかけに答えていかなければならないのである。ただレヴィ＝ストロースの考えは少なくとも最低限の答えは提示できる領域には我々を導いてくれたということは一方で言えるのであって、この後の論理展開に十分な示唆を与えてくれていることは認識しておきたい。

第四章 différenciationに至る前提としてのdifférenceとdifférance

ブルトンが「私とは誰か。」という問いかけをする時、それはレヴィ＝ストロース的な方法で把握し提示されるようなものではないことは、ブルトンが『ナジャ』において「私とは誰か。」の問いかけの後に展開している記述を見れば明らかである。ブルトンは次のように書いているのだ。「要は私がこの世でゆっくりと自分の中に発見していく個々の素質は、私に固有のものだろうが私には与えられていない一般的な素質の探求から私の気をそらせることは全くないということだ。私が私に認める好み、私が私に感じる親和力、私が受け入れている誘惑、私に起こり私にしか起こらない出来事、あらゆる種類のそうしたものを越えて、私が自分がしているのを見る動き、私一人が体験されるべきである感情、多くのそうしたものを越えて、私は、他の人たちと比べて、私の区別化は何に起因するのかではないにしても、何に存在するのか知ろ

うと努めている。私が他の全ての人たちの中であって何をしにこの世にやってきたのかそして身をもってしかその運動に応えることができないためにはどんな唯一の伝言を私はもたらすのかが私にわかるのはこの差別化を意識する正確な度合にあるのではないか。」(PI p.648)

例えば食べ物では何が好きか、どんな音楽を好むのか、今までどんな体験をしてきたのかといったようなことについて、もちろん個人の生活においてそれらは大事なことはあるけれど、それとはまた別に明らかに自分が他の人たちとは違っているものを見出そうとしているのである。ここにおいて重要であるのが、その違いを意味する言葉として、日頃それ程使われるとは思われないが、*différenciation*が使われていることである。通常違いと言えば*différence*が使われているわけであるが、我々はこの*différenciation*について論じる前にこの*différence*と更にはジャック・デリダによって提示された*différance*について明らかにしておこう。デリダも明らかにしているように、西洋の形而上学はプラトン以来階層秩序的二項対立によって支配されている。このようなものの考え方が比較的容易に我々にとって受け入れられやすいのが、例えば自分と他者というように自己の確立にとっては恐らく必要不可欠な二分法を日常的に用いているからだろう。自らにとって都合のいいものを善とし、都合の悪いものを悪とするような擬似的な倫理観もそれを助長しているように思われる。確かに精神と肉体という厳密に考えるならば明確には区分できないものに関しても、日常生活を送る上で便宜的に二分法を適用しているということが挙げられる。しかし日常生活のいわば御都合主義的な二分法ではなく、それらの二分法に哲学的に対峙してみるならば二項対立の危うさが明確になってくる。この点についてデリダは『グラマトロジーについて』で、次のように表現している。「外部は、いつものように、内部と単なる外在性でしかない関係を維持する。外部の意味は外部の外に囚われている内部の中に常にあったのであり、そして逆も言えるのである。」(DG p.52)「しかし、我々が既に行なったように、考察された代補の概念は、経済的な (下線原文) 概念として、矛盾なしに同時に逆のことを言うことを我々に可能にするはずである。」(DG p.254)

ここにおいて見られる違いとは同一性の論理と古典的存在論の原理からすれば*différence*なのであるが、デリダの指摘によれば、固定化されたものではなく絶えず動きを伴うものとして*différance*という語を提示するのである。これについてデリダは次のように説明している。「パルマコンが〈両価性〉であるということは、従って逆のもの(魂/肉体、善/悪、内部/外部、記憶/忘却、話し言葉/書き言葉、等)が対立する場、互いに関係付け、ひっくり返しそして互いを通して運動と戯れを確かに構成するためである。逆もしくは違いがプラトンによって固定 (下線原文) されるのはこの戯れもしくはこの動きからなのである。パルマコンは動き、場そして差異の戯れ(生産)なのである。それは差異*différence*の差延*différance*である。」(LD p.158)

そしてこれと同様の考え方はブルトンの中にも見られるのであって、『シュルレアリスム第二宣言』においては次のように書かれている。「生と死、現実と想像、過去と未来、伝達可能なものと伝達不可能なもの、高いと低いと矛盾して知覚されるのをやめる精神のある一点が存在すると信ずるのに充分である。」(PI p.781)「美と醜、真と偽、善と悪の不十分で不条理な区別を無視したい欲望が生まれ維持されるのはこれらの意味のない表現のまさにむかつく気持ちが湧き立つからである。」(PI p.782)

つまりここにおいてデリダを読んでいなかったブルトンが階層秩序的二項対立を脱構築しようとしていたわけであり、différenceの問題については自覚的であったということがわかる。そしてこのdifférenceの次元においてブルトンが自らの独自性を問題にしようとしても、無意味であることは明らかである。これは明らかに独自のものであると認識し主張したところで、全ては関係の中に取り込まれてしまうのである。デリダの言うように内部と外部の二項対立を考えてみた場合でも、それは「私」の内と外という境界線を明確に引くことが出来ないということにも表われている。ここでサルトルの対他存在を持ち出してくるなら、この現実にいる「私」とは他者によって捉えられた「私」であって、それは最早「私」のものではないのである。この現実において口にされる「私」という言葉は、既に「私」の手から離れ「他者」の所有物としての「私」となっているのである。ここにおいて求められる「私」の独自性は他者の中にある独自であるということなのか。それは極めて稀であるということなのか。このdifférenceという網の目の中に投入されてしまえば、いかに特別なものであると認識されていても全ては他との差異によって捉えられてしまう。差異があるのが当然であって、そこにおいて独自性を主張することは最早不可能である。更にdifféranceによって脱構築を図ったところで、それもまた脱構築される対象として捉えられることになる。このような差異の網の目の中に存在するということは、全てを相対化させてしまうことであり、敢えてそれでも自らの独自性更には正当性を主張しようとすれば暴力的にならざるを得ないだろう。デリダの脱構築が秩序を崩壊させる危険な思想として捉えられていたのも、その前提となる社会秩序が階層的二項対立によって保証されていたからである。もちろんそのような秩序が保証されているのは、二項対立がそもそも暴力的であったからで、また一方で差異の網の目の中で自らの独自性なり正当性を主張することは他者の否定を伴うことになり、これも同様に暴力的な動きをもたらしてしまうことになる。『シュルレアリスム第二宣言』において「最も簡単なシュルレアリスムの行為」(PI p.782)に言及しているブルトンは、その主張するところに反して本質的に非暴力的というか、暴力になじまないということはその注を注意深く読めば明らかである。それでは暴力的手法に頼ることなく、差異の網の目の中に埋もれてしまうことなく、更には対他存在という他者の所有物によって自らを見失うことなく、ブルトンがそのdifférenciationをいかにして明らかにすることができるのだろうか。我々はここにおいて暴力の問題を視座に捉えつつ、それを克服するとともに他者に翻弄されることなく他者と協調しながらも、その中で自らの独自性や正当性を確保するという難題に取り組まなければならないのであるが、その問題を論じるテキストとしてラカンの『エクリ』に収録されている「カントとサド」を読まなければならない。

第五章 différenciationと相互性

différenciationの動詞形はdifférencierで、「差をつける」とか「区別する」とかの意味がある。ちなみにdifférenceの動詞形はdifférerであって、「違う」「異なる」という意味があり、また「延ばす」「延期する」という意味もあって、ここからデリダはdifféranceという言葉を作ったのであった。différerが「違う」「異なる」という意味を持つことから、違いというのは既に状態として認識されていて、それがdifférence「差異」として捉えられていると考えることができる。一方

différencierは「差をつける」とか「区別する」とかの意味を持つのであるが、それでは差をつけたり区別したりする主体は誰なのであろうか。認識する主体はブルトン自身であろうが、これは何も自らを特権的存在として捉えたいという欲望の現われというわけではなく、あくまで客観的とも言うべき状態もしくは現象が前提となっていると思われる。それではその前提となる状態もしくは現象とはいかなるものであるのか。ブルトンがシュルレアリスムの活動として掲げているものに、デリダ的用語を用いれば階層的二項対立の解体がある。ブルトンの言葉に従うならば、次のように表現されている。「知的観点において、古くからの二律背反の不自然な性格をあらゆる手段でもって試練にかけ是非とも認識されることが問題であったし、今も尚問題である。」(PI p.781)

このようにして階層秩序的二項対立の暴力性を解消しようというのだが、一方でdifférenceの網の目の中で敢えて自らの独自性なり正当性を主張することは他者の否定を前提とするか同時進行的に伴うことにもなりかねず、この暴力の問題は常につきまとうことになる。この暴力の問題を論じたものにラカンの「カントとサド」があり、我々はラカンの主張に従いながらブルトンの言うdifférenciationの解明に繋げていくことにしよう。まずラカンの言うサディストの論理というものは、自らの快楽のために他者を利用し得るというものである。しかし「いかなる現象も喜びに対する恒常的關係を利用することはできない。」(EII p.120) のであるから、たとえ一時的であれ目的を達することができたとしても、社会において恒常的な関係として成立することはできない。何故なら「各人を好きなように享受するため万人の権利を一時停止にする口実とすることができないだろうというのは、いかなる人間も他人によって所有物になったり、いかなる方法でも占有物とはなり得ないということからである。」(EII p.126)

そしてここに見られる道徳的命令、つまり他人を自らの欲望のために利用してはならないとする命令は、まさに他者の口から発せられるのである。ラカン曰く、「道徳的〈掟〉は他の原理原則を持たない。」(EII p.125)

ここにおいて自らの欲望のために他人を利用しようとしていた主体は分裂することになる。つまり自らの欲望を満たそうとする主体と、その欲望を満たすために利用しようとしていた他者からの否定の命令を突き付けられている主体とに分裂することになるのである。あるいはまた次のように説明することも可能であるかもしれない。つまり自らの欲望を満たそうと他者を利用している主体は、その他者の羞恥心を前提としなければならず、必ずしも思いのままというわけでもないということなのである。従ってもし自らの欲望を他者を介して満たそうするのであれば、ラカンの言うように「欲望、それは〈他者〉の欲望である。」(EII p.137) ということが前提でなければならないのである。少なくとも半分は他者の欲求を認めなければならない。ラカンは次のように書いている。「ここまで我々の言わんとすることを読んだとすれば、欲望はより正確に少なくとも足は〈他者〉、そしてたとえまたとりわけ彼がたまたまちぐはぐであるとしても、価値ある人の中にある幻想で支えられることがわかる。」(EII p.137)

ここにおいて読み取らなければならないのは自らの欲望を満たすことの前提にあるものが他者の欲望ということであり、それが可能になるのは両者ともに自由でなければならないということである。ラカンはここにおいてカントを引用しているのである。「想像してみ給え、と彼

は我々に言っている、誰かが自分の情報に抗することはできないと主張していて、愛する対象とその機会が現われ、つまり彼がその機会を見出す家の前に絞首台を組み立てておいたとするなら、彼が彼の欲望を満足させてしまった後すぐ彼をそれに縛るとして、それでも尚それに抗することは彼にとって不可能だろうか。彼が何と答えるか言い当てるのは難しくはない。しかし彼の君主が彼に、もっともらしい口実という手段で破滅させようと思っている正直な人に対して虚偽の証言をするよう命令し、従わなければ死刑だとしたなら、彼の生に対する愛着がいかに大きいものであり得たとしても、このような場合それに打ち勝つことが可能としてみなすだろうか。彼がそうするかそうしないか、恐らく敢えて決めることはないだろうということであるが、可能であるとするなら、彼はためらいなく取り決めるだろうということである。彼は従ってそれをしなければならないという意識があるのだから何かをすることができると判断するのであって、彼は彼自身の中に、道徳的掟なしに、彼にとって常に見知らぬものであっただろう自由をこのように認識するのである。」(EII pp.137-138)

ところがこのような感覚を持たない人物も当然存在するわけであって、ラカンはそのような仮定をしている。「彼の最下層の人間にそれはそうとより劣った者がいると仮定して、それが暴君がその欲求を満足させ得る方法だった場合、本当の証言をすることが偶然にせよ彼の義務であるかどうか尋ねるとする。」(EII p.140)

我々はこのにおいてラカンと同様に明確な結論に至ることはできないのであるが、そもそも自らの欲望が他者の欲望であるということを理解するならば、つまりは欲望の対象が何であるかを明確にしなければ、結局のところどうすべきであるかの解答に辿り着くことはできないのである。ラカンはまさに次のように書いている。「我々は、それが彼の欲望のもともとの欲望であるということから、我々が欲望について教えることを思い起こさせるためにしか、〈他者〉の欲望として表明するためにしかここで導入することができないということである。」(EII p.141)

このように考えるならば、自らを犠牲にして他者を優先させるという道徳的掟の見地からではなく、あくまで自らの欲望を満たすということからも他者の存在を認めるという立場が必要となるのである。そしてラカンはこの立場を「相互性」の名において表明している。「相互性とは、彼らの〈相互的な〉立場から、この関係を同等なものと捉える二つの主体を結合する単純な一本の線の上に確立される可逆的關係であって（中略）いずれにせよ、相互性をそのようなものとして（相互性であって報復の責任はない）（中略）使われることができる我々の行動方針に既に表現されるべき点である。」(EII p.124)

相互性は自らの欲望を満たすことから必要な立場であり、また既に言及したように、社会に存在し続けるためには反対給付が絶えず行なわれる関係が必要であるとするレヴィ＝ストロースの考えにも合致している。このように考えるならば、ブルトンの言うdifférenciationがいかなるものであるかの理解も容易になるのではないかと思う。つまりただ単に他者との違いを提示するだけではdifférenceの網の目の中に入り込んでしまい、全ては相対化されそこに独自性や正当性といったものを見て取ることは困難になる。ところが社会が存在し続ける前提とも言うべき相互性を基準として考えるならば、自らと他者との関係を前提としているので、自らの

判断だけではなく他者によっても否定され難い確固たる基準とすることができる。そしてこの相互性を一つの基準として掲げた時、それに同意するかどうか、それを体現しているかどうかによって自らを他者からdifférencierすることは可能であるし、いわば絶対的とも言うべき確信に至るのではないかということである。ただブルトンのテキストにおいては恐らくブルトン自身ある程度自覚的であったと思われるのであるが、直接的な言及というものは見られないので、あくまで我々の推論という域を出ないわけである。ただdifférenceではなくdifférenciationという用語を用い、そこにブルトンの特権意識、根拠のない特権意識を見ないとすれば、以上の論理展開になるしかないというのが我々の考えなのである。

第二部 ファルスという名で呼ばれるシニフィアン

第六章 探求の対象は何か

ブルトンが『ナジャ』において10月12日から13日に渡っての出来事を記述した後、次のように書いている。「ここでこの死に物狂いの追求が終わるということがあり得るのか。何の追求なのか、私は知らないが、精神的誘惑の全ての技巧を用いるための追求（下線原文）なのだ。」(PI p.714)

ブルトンが追求という言葉を用いながらも、何を追い求めているのかわからないと言う。この点について我々は奇異の念を持たざるを得ない。何を求めているのか。ところがこの記述の後に、あたかも我々にとって参考になるだろうと言わんばかりに次のような記述を続けるのである。「何も——ナトリウムのような、異例の金属を切る時、それらの輝きも——ある地域において、採石場の燐光も——立坑から上がる素晴らしい光沢の輝きも——私が火の中に投じたために時刻を告げながら音が弱まっていく時計の木のパチパチいう音も——様々な姿勢のもと『キュテラに向けての乗船』が一組の男女しか描いていないことを確かめる時それが及ぼす魅力の増加も——貯水池の風景の荘厳も——取り壊された建物の、小さい花や煙突の影を伴った、壁面の魅力も、つまりこれらの何も、私にとって私の固有の力を構成する何も、忘れられなかったのである。」(PI p.714)

ブルトンが『ナジャ』において求めていたのはナジャではなかったのか。あるいはナジャと言わずとも、後で「君」という呼びかけで明らかになる理想の女性ではなかったのか。更に言うなら、これらの女性を通して思い描いている愛ではなかったのか。ブルトンは上記の示唆を与えた上で、ナジャとの関係にも触れ次のように続けるのである。「現実、私は今わかっているが狡猾な犬のように、ナジャの足もとに横になっていたこの現実の前で我々は誰だったのか。いかなる風土で我々は、このように熱狂的に象徴に委ねられ、類推の悪魔の餌食となって、最後の奔走、奇妙で、特別な配慮で自分たちの中に見ていた対象で確かにあり得たのか。」(PI p.714)

ブルトンにしてみればナジャと一緒にあってあるいはナジャを通して見るができるものこそ素晴らしかったということなのであろうか。そのためにこそナジャが必要だったということなのであろうか。ある程度の映像は思い浮かぶし、それは確かに魅惑的なものであろうが、ブルトンが少なくとも『ナジャ』においてそれを明確にしていない以上、我々はとりあえず推

測するしかないわけである。ところが一方、ハメットの『マルタの鷹』において何が求められているかということは明瞭である。それは題名にもなっているマルタの鷹と呼ばれる黒い鳥の形をした彫像である。我々はここにおいて後の展開に必要となるかもしれないという期待を抱きつつ、この黒い鳥について知り得ることをまとめていきたいと思う。この黒い鳥が実際どのようなものであるかについては作中人物のガトマンによって語られるのであるが、その黒い鳥がマルタの鷹と呼ばれることについては歴史的経緯が関係してくるのである。その詳細については「第12章 メリーゴーラウンド」に書かれているのであるが、我々としてはそれが生きた鳥でも剝製となった鳥でもなく、「この1フィートの宝石で飾られた鳥」(MF p.125) だということを知っておく必要がある。その「宝石で飾られた鳥」が用心のために「かなり興味深い黒の小像以外の何物にも見えないようにペンキを塗ったかエナメルをかけた」(MF p.126) ことから黒い鳥と呼ばれているのである。この黒い鳥を求めて私立探偵サム・スペードが活躍するというわけであるが、もともとスペードがその黒い鳥を追いかけていたわけではない。彼はあくまで私立探偵であり、依頼者の要請を受けて探し回っているということであり、本当に求めているのは黒い鳥が何であるかを説明したガトマンという太った男なのである。またスペードが探し求めるといっても、ごく単純な依頼人と私立探偵の関係というよりも、当初別の依頼をしてきたワンダリーという若い女性、実際には後でブリジッド・オショネシーという女性と関わったことから、ガトマンから黒い鳥を持っていると思われ事件に巻き込まれてしまったというのが真相である。スペードとしては職業上あるいは巻き込まれた事件を解明するためにこの黒い鳥を手に入れることが必要ではあったのだが、スペード本来の欲望の対象というわけではないのである。従って黒い鳥を本当に欲しがっているのはガトマンという男ただ一人ということになるのであろうが、このガトマンにしたところでこの黒い鳥のことを本当に知っているとは言い切れないのである。確かにガトマンはスペードに対して黒い鳥がいかに価値あるものであるかを歴史的経緯から説明していくのであるが、このガトマン自身にしたところでこの黒い鳥の本物を見たことがないという事実注目すべきである。そして最後にジャコビ船長がスペードに渡した黒い鳥が結局のところ偽物であったということから、そもそも黒い鳥は存在していたのかという思いにまで至るのである。つまり価値ある黒い鳥というシニフィアンだけが浮遊していて、その実体は存在しないという構図である。しかし実体がなかったとしても人々は欲望に駆られて殺人まで犯すわけであり、それだけの影響力は持っているのである。そして探し求めていた黒い鳥が偽物であったとわかり、ガトマンは怒り衝撃を受けるのであるが、思い直して更に本物の黒い鳥を探し求めようとする。ここにおいて既に指摘したことを再度確認することができる。つまり自分の欲望とは他者の欲望だということである。確かにラカンも言うように、欲望の対象となっているものを手に入れた場合、その欲望は終息してしまうということを考えるならば、欲望の実現を先延ばしにすることが肝要なのである。ハードボイルド小説においては、私立探偵は事件が解決されたとしても、もちろん物語の構成上事件は解決されなければならないわけであるが、その後にも事件の依頼があるということが常に既に決まっているのである。実際に何かの事件の依頼があったかなかったか、それが書かれているか書かれていないかに関係なく、欲望の維持のためには事件の依頼は必然的であり運命付けられている

のである。そのためスピードにとって黒い鳥がガトマンによって追い求められ手に入れられるということになったとしても、別の事件によって欲望を維持することになるのである。ただ留意しておかなければならないのは、ガトマンが黒い鳥について語るその起源からの話や実際にその黒い鳥が存在するのかということも含めてかなり曖昧な点も多く見られるのであるが、少なくとも欲に駆られた人たちを引き付けることができているわけであるし、この事件についてスピードは「フリットクラフト」のことを語るように後々誰かに語って聞かせることができるだろう。つまり実体のあるなしに拘らず、黒い鳥というシニフィアンは存在するのである。ここにおいて何も『マルタの鷹』と『ナジャ』の構成上の類似性や共通点を前提としているわけではないのだが、黒い鳥の果たす役割について考えてみる必要はあるかもしれない。それは金銭的な意味での価値ということではなく、容易にその存在を認識できて手に入れやすく、また人々の手に渡りやすいという意味である。そしてこのことはレヴィ＝ストロースの言う三つのコミュニケーションのうちの一つ、つまり財貨のコミュニケーションとしての役割を果たすことができるのではないかという予測も成り立つのである。

第七章 シュルレアリスムのオブジェ

『マルタの鷹』にあったのだから『ナジャ』にもあるはずだという短絡的類推ではないが、『ナジャ』にも黒い鳥に該当するものがあれば物語としての展開が容易になるという考えから我々は『ナジャ』のテキストを見直してみる必要があるだろう。そもそも題名として提示されているわけでもないし、読者に容易に見て取れるようにも設定されていないのであるが、例えばブルトンが『ナジャ』においてナジャの物語を始める前にブルトン自身が体験したシュルレアリスムのとも言うべきいくつかの挿話を紹介していて、その中に次のような箇所がある。「更に全く最近、ある日曜日、友だちと一緒に、私はサン＝トゥアンの〈蚤の市〉に行っていた時（私は、他のどこにも見つからない、時代遅れで、断片にされて、利用できない、ほとんどわけのわからない、私が理解しそして私が好む意味で結局のところ倒錯的なこれらの物を求めて、しばしばそこにいるのだが、例えばでこぼこして、ニス塗った、私には意味のない浮彫と陥没を見せていて、水平と垂直に赤と緑の細い筋があって、大切に宝石箱の中に入れられていて、イタリア語の標語がある白いこの種の半円柱のようなものだが、私は自宅に持ち帰り、仔細に調べてみたところ、ある年のある街の人口の、三次元で作成された、統計にしか対応しないと私は結局のところ受け入れたわけであるが、それでもそれについて私には最早読むことができないものとなっているのである）、我々の注意は、紙切れ、前世紀の黄色くなった写真、価値のない本や鉄製のスプーンの非常に細い陳列の中に埋もれた、ランボーの『全集』の非常に新しい一冊に同時に向けられた。」(PI p.676)

このように書かれているからといって、『ナジャ』のテキストがブルトンによる蚤の市掘り出し物記といった体裁をなしているわけでもそれが主題となっているわけでもないのであるが、それでもナジャの物語が始まる前の挿話の中に以上のような記述が入っているのである。また実際10月4日から12日までの日記形式で書かれている箇所においてもオブジェについての記載はあるのだが、その後のナジャについて半ば反省的に思いを巡らせている箇所で、ブルト

ンはナジャの描いたデッサンの中に描かれている様々なものに言及している。そしてその後の箇所においてブルトンは次のように続けているのだ。「何日か後に、実際、ナジャは、私の家にやってきて、これらの角をギニアの大きな仮面のそれとして再認（下線原文）したのだが、それは少し前アンリ・マチスの手であってそして私は鉄道の信号を思い起こさせる巨大な頂飾りのために常に愛していたし恐れていたけれども、彼女はそれを以前見ていたように書架の内側からしか（下線原文）見ることができなかったのだ。同じ機会に彼女はブラックの絵（『ギターを弾く人』）の中に常に私の好奇心を掻き立てた人物の外側にある鉤と綱をそしてキリコの三角形の絵（『苦悩の旅』や『運命の謎』）の中に例の火の手を再認した。ニュー・ブリテン島の、赤のニワトコの髄とアシで出来た、円錐形の仮面は、彼女にこのように叫ばせた、〈あら、シメヌよ!〉、座った酋長の小さな彫像は彼女には他のもの以上に威嚇的に見えた。彼女はマックス・エルンストの絵（『しかし人々はそれについて何も知らないだろう』）の殊更難解な意味について長々と説明したが、それはカンバスの裏に書いてある詳細な説明文と全く一致していた。私が手放した別の呪物は彼女にとって悪口の神だった。別のものは、イースター島のもので、私が手に入れた最初の未開のオブジェであるが、彼女に〈お前が好きだ、お前が好きだ〉と言っていた。ナジャはまたメリュジヌの顔立ちで何度も姿を現わした。」（PI p.727）

特定のオブジェのみを抽出して提示することは、予め我々の論考の展開にとって都合のいい部分だけを抜き出しているかのような意図的な引用になってしまいかねないということから、ブルトンが書いているテキストそのまま全てを示しておいたのだが、この中でも既に『マルタの鷹』における黒い鳥と類似するオブジェを指摘することができるだろう。それは「ギニアの大きな仮面の角」であり「円錐形の仮面」であり「酋長の小さな彫像」であり「イースター島の呪物」である。ただブルトンにしてみればこれらのオブジェを紹介するのみで、これらについて長々と言及するということはしていない。それでもどこかにこういったオブジェの記憶が残ってしまうのは、このテキストの中に挿入されている写真図版の中に例えば「円錐形の仮面」や「イースター島の呪物」が入っているからである。従ってこのことからブルトンの意図を読み取ることができるであろう。そして更にナジャの物語が終わった後ブルトンは再度その見直しを試みるのであるが、そこには次のように書かれている。「私はこの物語が導くことになる場所のいくつかを見直すことから始めた。実際、私は、何人かの人やいくつかのオブジェについてと同様に、私自身見つめていた特別な角度で写真の映像を撮ることに固執していた。」（PI p.746）

我々はここにおいて場所の見直しという点に注目していたのであったが、この見直しにおいてはオブジェも含まれているという点に留意しなければならない。そして以上の考察から明らかになってくることは、『ナジャ』をその構成上三つの部分に分けて考えることが出来るのであるが、オブジェという視点で捉えてみた場合、一つの繋がりを持っていることが理解される。つまりナジャの物語が始まる前の部分においては、オブジェを探し求めるシュルレアリストたるブルトンが示されていて、本体であるナジャの物語においては、ブルトンが所有しているオブジェに対してナジャがどのように関わってくるか、ナジャはどのようにそのオブジェを捉えるかということが問題視され、ナジャの物語の後の部分においては、それ程多くのオブジェが

示されるということはないのである。従って『ナジャ』においては『マルタの鷹』におけるように何らかの物=オブジェを探し求めるという形式はとっていない、確かにブルトンは『ナジャ』の問題とは別個に様々なオブジェを探し求めていたことはテキストにおいて示されているように事実なのであるが、『ナジャ』においてはそういったことよりもブルトン自身が所有しているオブジェに対するナジャの反応が重要だと言えるだろう。では何故重要となってくるのかということであるが、我々はこの問題を解決するために再び『マルタの鷹』へと戻り、ガトマンによって語られる黒い鳥ではなく、スピードにとってその黒い鳥の果たす役割について考えてみなければならない。

第八章 ファルスとしての黒い鳥

『マルタの鷹』における黒い鳥の果たす役割は何かについて、先行研究を参照しまとめておくなら次のようなものである⁴⁾。そもそも黒い鳥というのは「この1フィートの宝石で飾られた鳥」(MF p.125)であるということから、つまりその形態から男性器を想起させるものとして提示されている。ここにおいてラカンの考えに従うならば、子供が母親の欲望を満たす存在となることから離脱し、社会的に主体となる際に必然的に失われてしまった、つまり去勢されてしまったその代補としてファルスが考えられるということなのである。従ってここにおいて黒い鳥を探し求めるという行為は正当化されるわけである。またこのファルスが男らしさと結びついていることにも注目しなければならない。本来タフで非情な私立探偵と設定されているのであるから男らしいのは当然であるとしても、それを補完するものとして常に「拳銃」が携行されることになる。更に仕事として追い求めるものがファルスの代補物であるとすれば、男らしさとしては万全というべきであろう。もっともそれではファルスの代補物である黒い鳥を手に入れることができれば完璧かというところではないのであって、それはその時点において追い求められていた対象である黒い鳥が主体となり、追い求めている主体が自らの存在を見失ってしまうことになるからである。つまり黒い鳥を追い求めている人物からすれば黒い鳥は全てであるかもしれないが、一旦手に入れることのできた黒い鳥からその人物を見てみるならば、何もないということになってしまうだろう。そのため黒い鳥は手に入れられてはいけないので、あくまで象徴的存在として機能すべきなのである。黒い鳥の歴史について秘密にしておきたいような素振りを見せながらも、スピードに事細かに語ってしまうガトマンにしてもその黒い鳥の実物は見たことがないのであり、だからこそガトマンは黒い鳥についての情熱を失うことがないのである。またガトマンが語る黒い鳥の歴史についても、それがガトマンの情熱の深さを物語るとともに、黒い鳥をより遠ざけた存在にもしてしまっているのである。ガトマンが歴史について語れば語る程、ガトマンにとって意味を持ってくるのが黒い鳥そのものなのか情熱の証とも言うべき歴史の方であるのかわからなくなってくるだろう。この点スピードはこの黒い鳥の歴史に関しては冷淡というか、信じているのか信じていないのかもはっきりしない状態である。この意味でスピードにおいて男らしさはさほど不足していないと少なくともスピード自身は自覚していると見なければいけないのかもしれないが、それでも黒い鳥を追い求めようとするのは男らしさを体現しているハードボイルドな私立探偵という職業上の遂行と考

えられるかもしれない。以上のように『マルタの鷹』を捉えた上で、再度ファルスについてラカンの言説に従いながら確認しておこう。子供が母親との一体化を求めながらも大人になることによってそれが不可能なことであると認識させられる。まさに象徴的な去勢であって、それを補うべく指定されるものがファルスであって、これは現実的な意味での性的関係を想定していない。従って身体的次元ではなく様々なものが象徴的にファルスとしての機能を果たするのである。確かに形状において似ているという点是指摘されるだろうが、そこに何があるのかと言えばただの空虚があるだけで、要するにシニフィアンとしての機能しかないということなのである。つまり実体として存在しているわけではないので、絶えず手もとから離れ他者の間を流通し循環していなければならない。これは貨幣におけるのと同様であって、たとえ手もとに持っていたとしてもいずれは手もとから離れて他者の手に渡るということが前提とされてはじめて価値を持つのである。従って他者の間を流通し循環するものであれば何でもよいということになるのであって、フロイトもこのファルスが様々なものに変化していく等式を提示している。このように考えるならばファルス自体も実体のない空虚なものであり、かつ現実世界の様々なものに置き換わっていることから、わかりにくいという点是指摘しておかなければならないだろう。いわゆる典型的なものについては理解しやすいが、一旦それを離れると識別することが困難ということになるかもしれない。さてこのようにファルスを理解した上で『ナジャ』を捉えることになる。第七章において示した『ナジャ』に出てくるオブジェは、その時点では敢えて言及することを控えていたが、その形状からファルスとしての資格は十分にある。おまけに「イースター島の別の呪物は（中略）ナジャに〈お前が好きだ、お前が好きだ〉と言っていた。」(PI p.727) のであるから、ファルスとしての性格もより強く認識されるだろう。このように『ナジャ』においてはファルスの代補物がいくつか存在するということと言えるようである。しかし『マルタの鷹』の登場人物たちのようにブルトン社会的に認知された、つまりはジェンダー的な意味での男らしさを追求する必要があったのだろうか。そもそも男らしさというものは『マルタの鷹』を生んだアメリカ的なものであって、フランス的なものではないのではないか。ここにおいて我々はアメリカ的な男らしさを一旦離れて、ファルスの意味合いを探っていくことにしよう。確かにブルトンは理想の女性に出会うことを願っていたわけであるから、テキストにおいてファルスの代補物が存在することは何ら不思議ではないし、ナジャの物語が始まる前段階においては明確に次のように書かれているのだ。「私はいつも、森の中で、美しくて裸の女性と夜出会うことを信じられないくらい願っていたが、あるいはむしろ、一旦表明されたこのような願いが最早何も意味しないとなると、私はそのような女性に出会わなかったことを信じられないくらい残念に思っている。このような出会いを想像することは、要するにそれ程気狂いじみたことではないのだ。つまりそれは起こり得るだろう。全て（下線原文）は即座に止まってしまっただろうと私には思われる」(PI p.668)。

もっとも全ては停止しないからこそ物語は進行するわけであるし、ファルスも存在し続けるわけである。確かにこのことによってブルトンの欲望は維持され、更にはナジャと出会うということも起こる。その過程においてファルスの代補物である様々なオブジェが、ナジャと関わり補強されるという事態にも至るのである。そして更には、ナジャがそのオブジェと化すかの

ような領域にも達する。例えばそれは次のような箇所に表示されているだろう。「メリュジーヌは、全ての神話の人格の中で、彼女が確かに最も身近に自分を感じたそれなのだ。私は彼女が、額のとっぺんに星を残すように、是非とも美容師に彼女の髪をはっきりと区別された五つの房に分けてもらうようにして、できるだけこの類似を現実の生活の中に持ち込むよう努めているのを見たことさえある。それらは更に雄羊の角の形をした耳を前のところで完成させるために回転されなければならなかったが、これらの角を巻くことはまた彼女が最もしばしば委ねていたモチーフの一つだったのである。」(PI p.727)

ここにおいてブルトンの欲望は達成されたかのようなではあるのだが、果たして『ナジャ』におけるファルスとは一体何であったのか。ブルトンはそれを物語の最初から探し求めていたと言えるのであろうか。またこのファルスによってブルトンはアメリカ的なものではないにしても、男らしさを表現しているものであろうか。10月12日もしくは13日以降の記述において、ナジャから見たブルトンは次のように捉えられているのである。「彼女についてだが、私は言葉の真の意味において彼女が私を神と捉えたり、私が太陽であった(下線原文)と信じるがあったということを知っている。私はまた覚えているのだが——何もこの瞬間より美しくあると同時に悲観的であり得なかったものであり——スフィンクスの足もとで雷に打たれた男のように彼女には暗く冷たく思われたことを私は覚えているのだ。」(PI p.714)

前半部分は欲望の達成に至る箇所であり、後半部分は欲望の達成により欲望を維持できなくなった状態を表わしていると読み解くべきなのであろうか。もし仮にシュルレアリスム的なオブジェがファルスの役割を果たしているというのなら、ナジャの物語の後ブルトンにとって理想の女性とも言うべき「君」に出会う過程において、そのような存在が見当たらないということはどうに理解すればいいのだろうか。我々はここにおいて『マルタの鷹』で中心的役割を果たしている黒い鳥や、『ナジャ』のテキスト中に存在するシュルレアリスム的なオブジェに惑わされて、ブルトンの欲望の対象、そしてそれこそが『ナジャ』というテキストを成立せしめているものであると理解してそれを探し求めてきたわけであるが、シュルレアリスム的なオブジェが一定の役割を果たしつつも、従ってそのことは認めながらも、我々は全く別のものがブルトンの欲望の対象ではなかったかと考えるに至るわけである。ただそれがファルスの浮遊するシニフィアンであることは、揺るぎないところであると思われる。

第九章 対象aと浮遊するシニフィアン

『マルタの鷹』の結末においてスペードが手に入れた黒い鳥が偽物だとわかった時、我々は黒い鳥自体が本当に存在するのかという思いに駆られる。ガトマンがスペードに語って聞かせる黒い鳥にまつわる歴史、その起源から始まってどのような人の手に渡っていったかについて詳細に語られる話にしても、決してガトマンの捏造ではなく、彼の黒い鳥を手に入れたという欲望からすれば本当の話であることは明らかであるが、ガトマン自身本物の黒い鳥を見たことがない以上、黒い鳥が存在すると断定することはできないのである。最後に現われる黒い鳥の偽物にしても、本物の黒い鳥があるからこそその模造品としての偽物の黒い鳥が出来たということではなく、ガトマンの話からおおよそ黒い鳥というのはこのようなものであるに違いない

いと偽造されたものであるかもしれないのだ。黒い鳥を指し示す言葉があり、それにまつわる歴史もあり、それを求める様々な人々の欲望を掻き立てるということが事実としてありながらも、肝心の黒い鳥は存在しないということになれば、我々はこのことからすぐさまラカンの言う対象aを思い浮かべることができる。ラカンの考えによれば、自分自身を確立する根拠を探し求め、それによって常に自分自身を支え続ける必要があるわけだが、その対象となるものはこの現実には確固たるものとして存在するわけではなく、幻想にすぎないのである。『マルタの鷹』を例にとるならば、黒い鳥にまつわる歴史も全くの捏造というわけではもちろんないのだが、それが実際にどのような価値を持っているかは別にして、それが存在すると確認されたわけではなく、場合によっては本当は存在しないかもしれないのだ。それにも拘らず、つまり実際には存在していなかったとしても、この探求は成立するわけであり、ここにおいて黒い鳥はまさに幻想にすぎないことになる。しかし幻想ではあっても、あるいは幻想であるが故に欲望を掻き立てるわけであり、また手に入れることは不可能であることが予め運命付けられているわけであるから、欲望は維持され続けるのである。そしてこのような対象は必要不可欠であって、それがなければ不完全な存在は主体として成立することができないのである。ところがこの対象は『マルタの鷹』における黒い鳥のように簡単には手に入れることができないものであり、苦労の末やっと手に入れたと思っても偽物だったということにもなってしまうのである。そしてまたこの点が重要なのであるが、『マルタの鷹』において黒い鳥を探し求めるといってもその欲望の度合いは人様々であって、ガトマンのようにそれを手に入れるために生きているという者もいれば、スペードのように職業上探し求めることに一時的にせよ努力するが、たとえ手に入れた黒い鳥が偽物だとわかって、気を取り直して再び獲得に向けて動き回ろうという気はないという者もいて、黒い鳥自体に金銭面のことは別にして万人に共通の客観的価値というものは存在しないのである。むしろ価値の問題について言うなら、極めて主観的なものであって、ガトマンの心の中においてこそ価値があるということなのである。だからこそガトマンは黒い鳥を追ひ求める人物ということで、黒い鳥によって定義付けられるということになる。それではブルトンが『ナジャ』において何を追ひ求めていたのか。『ナジャ』において対象aとは何だったのか。ブルトン自身自分が探し求めているものが何であるかわからないとしているのであるから、テキスト上において明言されていないことは当然であるかもしれない。それでもブルトンがブルトンとして成立するためには、必然的にこの対象が必要なのである。そしてこの対象はブルトンによって追ひ求められながらも、ブルトンは最後にはこの対象を手に入れるのではなく見失ってしまうのでなければならない。その条件のもとでテキストに対峙していくならば、既に問題にしていたシュルレアリスムのオブジェはその対象ではないかもしれない。というのもナジャの物語の後、ブルトンがこの物語を見直すにあたって、人物やオブジェそして街の写真を撮ってテキストの中に挿図写真として入れようとするわけであるが、その際「この機会に、私はいくつかの例外を除いてそれらが私の企てに対して多かれ少なかれ抵抗しているのを確認した」(PI p.746)と証言するわけで、現実にある存在とブルトン自身の内心との間に若干のずれが生じてきていることが明らかで、その意味で対象を見失っているということも事実としてあるのだが、これらの対象は常に既にブルトンによって追ひ求められていたものだ

ろうかという疑問が生じてくるからである。このように考えるならば、ブルトンが追い求めていたものはオブジェではなくて、例えば謎の人なのであろうか。『マルタの鷹』において黒い鳥が探求の対象であったことを考えるならば、題名が探求の対象という類推から『ナジャ』においてはナジャ本人がその対象なのであろうか。確かにブルトンは理想の女性を求めていたわけであるし、最後にはナジャを見失う形になってしまうのであるから、対象aであるかのように見える。ただブルトンはナジャと会い続けている途中の段階において、既にナジャを追い求める対象ではないのではないかという疑問を呈するようになってきているのだ。例えば10月7日の記述の中には次のように書かれている箇所がある。「もし私が彼女を愛していないのなら私が彼女に会い続けることは許し難い。私は彼女を愛していないのか。私は、彼女の近くにいないが、彼女の近くにある事物により近いのだ。」(PI p.701)

あるいは10月4日から12日までの日記形式で語られる記述の後、10月13日のことを思い出して次のように書かれている。「10月13日の午後一番に、彼女は私に理由もなくその話を語って聞かせたので、私は永久に彼女と離れてしまいそうにさえる。(中略) 結局のところ別れが不可能だったかどうかは、私次第でしかなかったのだ。」(PI p.718)

つまり対象aは手に入れたと思いやつとのもので手に入れたと思っても手の間からこぼれ落ちるように逃げてしまい結局手に入れることができなかったというようなものであって、ブルトンが書いているように途中の段階で自分の求めているものではないのではないかという疑問をさしはさむようなものではないのである。それならばブルトンが求めているものは何なのか。ここにおいて再度題名に注目するならば、つまり『マルタの鷹』においてマルタの鷹である黒い鳥が対象aであるとするならば、『ナジャ』においてもナジャが対象aではないかという前提で考えてみた場合、ここで示されているナジャとはナジャ本人のことではなくて、ナジャという名前なのではないかということなのである。このように考えるならば、ブルトンがナジャの物語の終わった後の冒頭の部分で次のように書いていることが理解されるだろう。「だからこそそこを通る声は更に人間的に高揚し得ると私には思われるし、だからこそ私がそこに置きたいいくつかの稀な抑揚を棄てることはないのだ。ナジャ、ナジャという人格は非常に遠くにあるけれども… 他の何人かの人たちと同様である。〈不思議〉、この本の一頁から最後の頁まで私の信頼が少なくとも変わることはなかっただろう 〈不思議〉によってもたらされ、誰が知ろう、既に取り戻され、最早彼女のものではない一つの名前が私の耳もとで鳴らんことを。」(PI p.746)

第三部 ファム・ファタル

第十章 物語における女性を対象aではない

『ナジャ』においてナジャ本人が対象a、つまりブルトンによって追い求められる存在でないとすると、物語において存在することの意味は何だったのであろうか。我々はまず『マルタの鷹』に登場する女性たちについて学習しておこう。『マルタの鷹』に登場する女性たちは三人いて、一人目はスペードの探偵事務所の秘書であるエフィ・ベリンであり、二人目は物語の冒頭で殺害されてしまうのであるが、探偵事務所の相棒であるマイルズ・アーチャーの妻である

アイヴァであり、そして三人目は事件の依頼者で、最初はワンダリーと名乗っていたブリジッド・オショーンシーである。この三人の女性たちは物語において三人三様という形で設定されているのだが、スベードとは三人ともに恋愛感情が介在しているようである。問題なのは最後のブリジッドなのであるが、先の二人についても見ておきたい。秘書のエフィはスベードに対して忠実であり、秘書としての役割を十分に果たしている。先行研究によれば母親的存在とみなされてもいるようであるが、年齢が母親的ではないことに加えて、スベードがブリジッドと関係を持っていたことを新聞で読んで知ることによって一時的ではあれ混乱をきたすように思われることから、もともと恋愛感情を抱いていたのではないかと推測されるのである。二人目のアイヴァであるが、ただ単に相棒の妻に留まらず、スベードと再婚しようとしている存在なのである。事件がありその相棒のマイルズが殺されてしまうと、アイヴァはスベードが自分と再婚するためにマイルズを殺したのではないかと思うのである。事実はその通りではないのであるが、嫌いだったマイルズが死んだことでアイヴァはやっと再婚できると思うのである。秘書のエフィは秘書という立場上物語の最初から最後まで登場するのであるが、アイヴァに関しては物語の前半部分にしばしば登場し、事件の真相をわかりにくくさせている要因となっている。さて最後のブリジッドであるが、物語の冒頭においてはワンダリーと名乗り、自分の妹につきまとっている男を見張って欲しいという依頼をする。ところがその妹なる人物は存在せず、その見張りとしてその男を尾行したマイルズと、そしてその尾行されていた男であるフロイド・サースビーがともに殺されてしまうという事件が起こってしまう。ブリジッドはガトマンが探し求めている黒い鳥を手に入れていて、その用心棒的な存在としてサースビーを雇い、更にはスベードにまで助けを求めてきたというわけである。探偵小説なのであるから事件の依頼者があって当然であり、それが女性であったところで何ら差し支えないわけであるが、問題はブリジッドが色仕掛けでスベードを味方に引き入れようとするところである。先行研究によると⁵⁾、ここにおいてブリジッドのfemme fatale性というものが見出されるのである。このfemme fataleはとりあえずこの論考においては「宿命の女」と理解しているのだが、辞書によれば「妖婦」という訳語もあり、あまり上品とは言えない扱いを受けている。ブリジッドに関しても当初はワンダリーと名乗り、次にはルブランと名乗っていて、本当はといっても果たしてこれが本当の名前かどうか定かではないわけだがブリジッド・オショーンシーと名乗っているわけで、そもそもよくわからない存在ではあるのだ。またスベードと関係を持つに至った点についても、たまたま事件の過程において恋愛感情が生まれたのか、あくまで事を有利に展開させるための誘惑に過ぎなかったのかもよくわからないのである。ところがこのようなブリジッドに対してスベードは恋愛感情を抱くのであって、タフであり非情であるはずのハードボイルド探偵が求めていたものは何であったのかと考えさせられる点でもある。このようにブリジッドに恋愛感情を抱いていたスベードであるが、最終的には事件の真相をブリジッドから聞き出し、彼女が事件の犯人であることを明らかにして警察に引き渡すのである。ここにおいてスベードの恋愛感情、更にはブリジッドの素振りが本当であるかどうかは別にして、それが前面に押し出されてくれば、これはハードボイルド小説ではなくて単なる恋愛小説になってしまうだろう。むしろブリジッドが犯人までやってのけスベードを味方に引き入れるために誘惑するというまさに

femme fataleそのものであることがハードボイルド小説にとって必要であったと言えるだろう。そしてそれは何故かと言えば、ハードボイルド小説が俗世間を欲望にまみれた世界として描いているからであり、その欲望とは俗に言う「金と女」にまつわるものであって、『マルタの鷹』においては金を象徴するものが黒い鳥であって、女を象徴するものがブリジッドだということになるのである。さて一方『ナジャ』において登場人物として現われる唯一の女性と言ってもいいナジャであるが、彼女の存在はどのように捉えるべきなのであろう。『ナジャ』を恋愛小説として読めなくもないのであるが、10月12日までの記述とは逆にそれ以後のことはある意味冷淡と言える程のそっけなさである。ナジャが精神病院に入ったことも記されているが、そのこと自体伝聞によって知っているわけで、入院以後のナジャの状態については一切触れられていない。いわば見捨てられた形となったナジャであり、それを以ってして『ナジャ』を恋愛小説と言い切ることはできないであろう。ブルトンが求めていたものはナジャではなく、10月12日までの記述以後に展開される箇所においてブルトン自身自分が求めているものが何かかわからないというはある意味本当のことであったのだ。つまり自分がどういう存在で何を求めているのかを知りたいという気持ちで『ナジャ』は書かれたのだ。そして欲望の赴くまま対象に向かうのであるが、果たして自らの主体を常に支え続けるものであるかの判断を下しながら次々とその対象を変えていくことになる。例えば女性に限ったとしても、ブルトンはナジャを車に乗せてヴェルサイユからパリに向かう時の話をしているが、隣に座っている女性はナジャではあったが、「他のあらゆる女性でもあり得たし他のある女性（下線原文）でさえあり得ただろう」（PI p.748）と書き記しているのである。ひょっとして自分の欲望を満たすことができるかもしれない、そのことによって自分が誰であるかもわかるかもしれないという可能性にけるわけである。確かに容易に見出せるものであれば欲望は満たされ、そしてそのことによって欲望は消滅してしまうという事態に至るのであるから、もともと求めるものは空虚であり現実世界には存在しないものでなければならない。ブルトンが「新精神」において描いているように、いるようでありながらいくら探しても見つかることのできない謎の女が欲望を維持するためには必要だったのだ。ところがナジャは実在しかつ実際に深く関わる存在となってしまったのだ。これでは欲望は解消してしまうわけで、ブルトンとしては急いでナジャを不在へと送り返さなければならない。対象aというのはただ単に空虚であるとかもともと存在しないというだけではなく、手に入れることが禁止されているということでもいいのである。従ってここにおいてブルトンはナジャを容易には近づくことのできない存在へと追いやってしまうことになる。しかしこれで充分というわけではないのだ。ここが『ナジャ』が単なる恋愛小説に留まらないところであり、つまりブルトンが自ら求めるものを知り、自分が誰であるかを知るための一つの手段として女性が存在するのであり、ブルトンの知ることの欲求は更にその先へと進むことになるのである。

第十一章 物語における女性の欲望

『マルタの鷹』においてスベードがハードボイルド探偵として活躍できる背景には、事務所の秘書であるエフィの支えがあることは明らかである。秘書として当然の役割を果たすことに

加えて、スベード自身のことも気遣っている。その優しさはエフィの人柄にもよるのだろうが、結末においてブリジッドとの関係を知ってスベードに冷たく対応するあたりは恋愛感情もあったと推測できる。またアーチャーの妻であったアイヴァは本人の語るところによると、スベード自身が自分と再婚するように仕向けてきたということであるが、夫のマイルズが殺されてもそれをスベードの仕業と理解し、スベードと再婚するいい機会だという風に捉えている。何度も事務所やスベードの自宅にやってきては関係の進展を望むのであるが、それに対してスベードは冷淡である。最後にブリジッドはスベードと関係を持つことにもなるし、本当のところはよくわからないにしても、スベードに対して恋愛感情を持っているかのように振る舞うのである。つまりここにおいて重要になってくるのは、ただ単にスベードがどのような欲望を抱いていたかということだけではなく、相手の女性たちからも欲望の対象となっているかどうかということなのである。つまりラカンの言う欲望の弁証法である。そもそも自らの欲望とは他者の欲望であって、他人が欲しがっているものを自分も欲しくなるという構図で描かれるものである。ところが一旦自らの欲望に目覚めると、今度は自分が他者によって欲望の対象となることを望むようになる。これはヘーゲルの「二重化された自己意識」を用いてラカンが理論化したものであるが、このもとになったのがアレクサンドル・コジェーヴの『ヘーゲル読解入門』であるのでその箇所を明らかにしておこう。「人間は彼の人間的〈欲望〉、つまり他者の〈欲望〉を目的とする彼の〈欲望〉を満足させるために彼の人生を危険にさらしながら人間的であると《確認される》。ところで、〈欲望〉を欲望するということはこの〈欲望〉によって欲望された価値にそれ自体入れ替わりたいと思うことである。というのもこの入れ替えがなければ人は価値、欲望された対象を欲望するのであり、〈欲望〉それ自体ではないからである。他者の〈欲望〉を欲望するということは、従って私がそれであり私が《表現している》価値はこの他者によって欲望された価値であると結局欲望することなのである。つまり私は彼が彼の価値として私の価値を《承認する》ことを望むのであり、私は彼が私を独立した価値として《承認する》ことを望むのである。言い換えるなら、人間的で、人間発生的な、〈自意識〉や人間的現実を生み出す全ての欲望は、結局のところ、《承認》の欲望の関数である。そして人間的現実が《確認される》人生の危険はこのような〈欲望〉に応じた危険である。〈自意識〉の《起源》について語ることは、従って必然的に《承認》の目的で死ぬほどの闘争について語ることである。」(LH p.14)

このような観点から『ナジャ』を見てみるならば、ナジャのブルトンに対する欲望は明らかである。確かにブルトンはナジャを扱いかねると思うことがしばしばあり、それが二人の良好な関係を崩壊させてしまったということは否定しようがない。ブルトンがナジャとの関係を振り返った箇所において、自分はナジャとは理解し合ったことなどなかったのではないかとさえ言っているのである。つまり「彼女は今度という今度はそのことを何も考慮に入れないとか、時間に無関心になるとか、彼女がたまたま言うことがあった無駄な話題と私にとって大層重要であった他の話題と何ら区別しないと、私の一時的な気持ちや私が彼女の最悪の放心状態を大目に見なければならなかった多かれ少なかれかなりの困難を何ら気かけないことに決めていたのだった。私は言ったことだが、彼女は自分の生活の最も素晴らしい出来事をいかなる細

部も私に許すことなく物語ったり、ここかしこで場違いないくつかの思わせぶりに専念したり、彼女が他の営業に移りたいと確かに思うまで、非常に眉をひそめて、私に待つことを余儀なくさせたりすることに、残念に思っていなかったのだ、というのも彼女が自然のまま（下線原文）になることは当然のことながら問題外だったからである。何回も、最早それに固執することなく、彼女の価値の現実的な概念に彼女を立ち戻らせることに絶望して、私はほとんど逃げてしまっていた」（PI p.735）。

ここにおいてナジャの勝手気ままな振る舞いがブルトンを翻弄しているように見えて、主導権はナジャの方にあるかのようである。しかしこのような事態に辟易しているブルトンは関係を解消しようとしていて、その意味では主導権はブルトンの方にあるのである。何故ならナジャは最早ブルトンなしでは生きられなくなっているからである。当初はつまり10月4日初めて会う段階ではブルトンは「ためらうことなく私は、それに私は決めているのだが、最悪の場合を予想しながらも、見知らぬ女性に話しかける。」（PI p.685）という状態であったのだが、既に10月7日には自分たちの関係について反省的に捉えるようになる。つまり「彼女は私をどのように見て、どのように思っているのか。もし私が彼女を愛していないのなら私が彼女に会い続けることは許し難い。私は彼女を愛していないのか。私は、彼女の近くにいながら、彼女の近くにある事物により近いのだ。彼女の今の状態においては、当然彼女はある方法であれ別の方法であれ、突然私を必要とするようになるだろう。彼女が私に何を要求しようとも、それを彼女に対して拒否することは耐え難いだろう」（PI p.701）。

ところが二人の関係は徐々に距離を置くようになる。10月12日もしくは13日以降の記述においてブルトンは次のように書いている。「同時に取り返しのつかない破綻が彼女自身のそして最も人間的に限定された部分を引きずっていて、私があの日観念として抱いていた破綻が少しずつ私を遠ざけたということはあるかもしれない。」（PI p.718）

ナジャの奇異な言動が原因でブルトンとしては最早関係を続けることはできないと判断したということなのだが、ナジャにしてみればブルトンはなくてはならない存在であって、「ある日々には彼女は私の存在のみで生きているように思われていた」（PI pp.718-719）とまで書いているのだ。ところが実際にはブルトンはナジャとの別れを決断するわけであるし、『ナジャ』のテキストにおいても最後にブルトンはナジャを見失ってしまうことになる。10月4日から12日もしくは13日の日記形式で語られる記述においてブルトンとナジャとは毎日のように会っていて、またそれ以後についても具体的な日付については明記されないものの何度か会っていたのは『ナジャ』のテキストからもまた二人の手紙を調査したマルグリット・ボネの研究（PI pp.1510-1511）からも明らかであるが、気持ちの上では別れることは最早決定的であり、テキストにおいてはそのような事態に至った理由や正当化とも取れる記述が見られることになる。そしてそれらを生み出しているのはブルトンがナジャによって欲望の対象となっていた、承認されていたという事実に基づくのであるし、ブルトンが最早ナジャを欲望の対象としていないのであるから、ナジャがブルトンのことを現在どう思っているかと、自分の主体は揺らぐことはないという安定感なのである。ただナジャの欲望以外に何か必要なものがあつたのだろうか。

第十二章 第三者のまなざし

ラカンが鏡像段階を説明する際、つまり幼児が目の前の鏡に映っている自己の映像を自分のものとして受け入れていく段階に言及して次のような指摘を行なっている。つまり自分が自分となるためには自分自身ではなく全く別の他者を必要とするわけで、ランボー風に言えば「私は一個の他者である」ということになるわけであるが、他者として捉えられるのはその眼の前にある自分が同一化しようとしている存在だけではなく、更にその外に存在するということなのである。例えば幼児が鏡の前で自分自身の姿を見ている時、つまり自分の鏡像と対面している時に、それを好意的に捉えている母親のまなざしというものが重要なのである。そこにおいて鏡に映った子供の像を指差しながら「ほら、何々ちゃんですよ」という言葉でもってその映像を自分として受け入れることができるようになるとラカンは主張するのである。つまり他者によって支えられなければこのような鏡像段階は成立しないということであり、このことは自分が何であるかということを他者の中に見出さなければならないと同時に、そのことの是非もまた更なる他者によって認められなければならないということを物語っている。この関係はラカンが『エクリ』の中にある「〈盗まれた手紙〉のゼミナール」の中で展開している議論からも明らかだろう。この手紙についてその内容は最後まで明らかにされず、従ってその実体というものはないに等しいのであるが、それにも拘らず極めて有効に作用する。まず王と王妃と大臣の三人がいる部屋の中で、その手紙は恐らくは王妃に宛てられた恋文ではないかと推測されるのであるが、それを手に入ればかなりの力を発揮すると企んだ大臣によって堂々と盗まれることになる。その手紙について言及することができない王妃の弱みに付け込んだの行為である。王妃は警察の手によって取り返そうとするのであるがうまくいかず、ここにおいて名探偵の登場となる。この名探偵が首尾よく手紙を取り返すことに成功するのであるが、このポーの作品の主眼は何故手紙を見つけて取り返すことができたのかという点にある。もっとも我々の関心はそこではなく、物体としての手紙は事実存在するとしても、その手紙がそれとしての意味を発揮するのはあくまで他者によって認識されることによってであるという点にあるのだ。つまり名探偵に手紙を取り返されてしまった大臣にしても、もともと自分が盗んでいたということから事を公けにすることはできない。当然名探偵にしても当初関わっていた警察にしても、職業上の秘密とか政治的配慮といった見地から事を内密にしておくことは明らかである。従って手紙は実際に存在したとしても存在しないのと同じになってしまうのである。ところがこれが王妃の恐れたところであり、ここまで来れば大臣も手紙を持っていたとしてもかえって問題になってしまうだろうが、その手紙の存在を王によって認識されることによってその手紙ははじめて存在することになるのである。さてこのように考えていくならば、『マルタの鷹』においてこのような他者のまなざしというものは存在するのであろうか。それは母親的役割を果たしていると指摘されもする⁶⁾ 事務所の秘書であるエフィによるものである。スベードに言われたことを忠実に果たしていくのは秘書として当然であると考えとしても、スベードの言動に問題があればそれをはっきりと口にしているのであるから、逆に言えば役目を忠実に果たしているということはスベードのしていることを肯定していると判断することもできるだろう。スベードには自宅がありながらも、仕事で疲れて事務所に帰ってくる時の家庭的雰囲気を醸し

出すことができているということから、スペードを支援しているという風にも考えることができる。スペードのことを全くの善人と思ってもいいにも拘らず、スペードの味方としての立場を貫いているのである。それはボスと使用人の関係だからというわけではない。物語の最後の部分において事件の真相を新聞によって知り更にはスペードの説明によってそれを確認したエフィはスペードに対して厳しい反応をし、そのことにスペードは衝撃を受けるのであるが、このことでスペードはエフィによる承認を常に求めて仕事をしていたことがわかる。ハードボイルドの探偵といえども全ては自分で判断し責任を負うというわけではなく、背後にこのような承認があるからこそ強がることもできたというわけなのである。そしてこのような事態は『ナジャ』においてはどのようになっているのであろうか。ブルトンとナジャを見つめる他者のまなざしというものは存在しないのだろうか。敢えてそれを見出すとすれば、10月12日の記述は次のような内容から始まっている。「私が彼女の話を話したマックス・エルンストだが、彼はナジャの肖像画を描くのを承諾するだろうか。サッコ夫人は、彼が私に言うには、歩いている時にナディアとかナターシャとかいう女性に出会ったのだが、彼はその女性を愛さないだろうし——これはほとんど彼女の言葉なのだが——彼が愛する女性に肉体的苦痛を引き起こすだろう。この禁忌は我々にとって充分であるように思われる。」(PI p.710)

直接ブルトンとナジャに言及したものではないにしても、ブルトンには気になる場所であったようだ。それにこれ以外のものはないと言っていい。それだからこそブルトンは10月12日もしくは13日の記述の後で「現実、私は今わかっているが狡猾な犬のように、ナジャの足もとに横になっていたこの現実の前で我々は誰だったのか。」(PI p.714) という問いかけをし、あたかも他者による承認を求めているかのようであるのだ。ところが実際にナジャが精神病院に入ることになり、ブルトンの関与の問題が指摘されるようになると、ブルトンは直接ではないにしてもテキスト上において反論することになる。つまり「私以外の人たちは先行している全てのことの宿命的な結果として彼らには見えてくるに違いない、この事実について非常に無益ではあるが何かと非難するだろう。最も抜け目のない人たちは、私がナジャについて報告したことの中で、既に妄想観念にするのが適当である部分を急いで探さだろうし恐らく彼らは彼女の人生における私の介入、これらの観念を広げていくことには実際好都合な介入に、ひどく決定的な価値を与えるだろう。〈ああ! いやはや〉とか、〈想像できたでしょう〉とか、〈私はそう思っていたんだ〉とか、〈こういう事情だから〉とか言う人たちが、程度の低い全ての馬鹿者たちに関わることにについては、私は彼らとは言い争わないでいる方がいいというのは言うまでもない。」(PI p.736)

ここにおいて第三者による承認どころではなく、否定的な見解が出されることになる。ブルトンがナジャとの関係について触れ、自分たちは何だったのかという問いかけをしているにも拘らず、このような否定的見解を示されることになると、自分の主体性が揺らぐことにもなるだろう。ブルトンとしてはこれでよいというか自分の思うところを貫いてきたわけであり、絶対的に自分が正しいというのではないにしても、第三者の好意的まなざしを期待したいところである。仮に否定的な見解を招くことが予想されたとしても、それを予期しているような安定した主体を前提としたいところである。否定的な見解が示されたとしても、それを予め知って

いたかの如く静かに受け止める安定的な主体を望んでいるのだ。しかし自分のことはよく知っていて自分は正しいのだという根拠のない主張をするのでなければ、どこにその承認を求めればいいのか。ブルトンはナジャの物語を終え、それを見直すことを試み、更にはその当時理想の女性として捉えていた「君」という女性を登場させた上で、我々にとってはあまりにも唐突に思える程に美についての考えを明らかにするのである。それは哲学的というよりもむしろ象徴詩的であって、容易には理解し難いのであるが、恐らくは第三者の承認を越えた何かといったものが示されているように思われるのである。

第十三章 女性を越えたところに成立する象徴的世界

『マルタの鷹』のような大衆小説、といって大衆小説を貶める意図は全くないのであるが、そこに成立する価値観は端的に言って金と女ということであり、それを前提にして読まなければならない。一方問題は『ナジャ』であって、ブルトンがナジャを欲望の対象とし、更にはナジャがブルトンを欲望の対象とすることによって主体性を確立し、ブルトンは自分が誰かを明らかにできるはずであった。確かに変わったところのある女性であるから、恒常的に関係を維持するのは困難であるにしても、相互に求め合っていたわけであるし、ナジャからの必要度はかなりのものであるのだから、承認ということを考えてみるならば充分満足のいく状態であると思われる。それにも拘らずということで問題になるのは、いくらブルトンが理想の女性を探し求めるとはいっても、女性が自己の確立において全てではないということなのである。ここにおいてラカンの言う象徴的な意味における父の存在というものが問題になってくる。既に指摘した例で言うなら、ブルトンとしてはナジャを求めることは必然的であったと断言していい。ナジャとの関係を解消することについても、ブルトンなりに充分考えた上でのことだということも理解できるし、現実的なことと言うなら、ナジャのような女性との関係を維持することはいい悪いではなく精神的に無理があるということすら可能である。それでも自分は絶対的に正しいというわけではなく、第三者的な他者の承認もあればより安定した立場を有することができるだろう。しかし実際には否定的な見解が示されたわけで、自分が正しいというのではないにしても、世間の考えも容認し難い。ここにおいて自己の立場というものは確固たるものではなく、不安定なものになっている。そしてこのような時にこそ、絶対的な視点を求めることになるのである。しかしそのようなものは現実のどこかにあるというわけではなく、あくまで象徴的なものに限られる。しかしそうではあっても、そのような立場は必要なのである。そしてそれは『ナジャ』においては美として示されている。もちろん美という言葉を持ち出すことによって全てが解決できるというわけでもない。美という言葉によって表現しようとしても、全てを覆い尽くすことなど出来ずにそこから漏れていってしまうものも多くあるはずだ。しかしそれにも拘らずこの言葉に依存するとすれば、他者の言動に惑わされずに一つの安定した立場を確保することができる。もちろんそれで全てうまく表現し尽くすことができるわけではないが、少なくともその言葉によってよりよく表現しようとすることは出来るはずだ。ここにおいて美とは何かについて、自分としてはこれが美だと思うという主観的な立場ではなく、また他者によって何が美と思われるかという対他存在的な立場でもなく、美とは本質的に何なのかについて考

えていこうとする象徴的な立場が成立するのだ。そしてこれは超越的な立場で全てを支配するというものではなく、我々の内心においてそのような立場が設定されるということである。そもそも我々は自分自身では安定した存在になることが出来ずに承認を求めて現実世界をさ迷うことになるのであるが、そのような事態は決して安定的な自己の確立をもたらさない。そこで現実世界において垣間見られた例えば美なるものの片鱗を想像的に捉え、象徴的次元において心の中で一つの基準として提示するのである。そのためには確かに現実世界に美らしきものの美のようなものがたとえ主観的にでも存在していなければならないし、それを美なる言葉でもって捉えるという言語化作業が必要となってくる。ここにおいてヴィトゲンシュタインが言うように、語り得ぬものについては沈黙し体系の外に出してしまわなければならない。それは『ナジャ』においてブルトンが提示した結論に「君」なる女性が付け加えた「全てか無か。」(PI p.752)の表現に符合するものだろう。そしてブルトンはこの表現について次のように書いている。「私はこの公式に対して決して反論することはないだろう、世界全体に対して世界の防衛に向かいながら、情熱は今度という今度はその公式で武装したからである。せいぜい私としては、この主題について、情熱であるということなら、私に理解できる状態を越えているということではあるはずがないと仮定して、この〈全て〉の性質について情熱を探ってみようという気にはなるだろう。その様々な動き（下線原文）は、私がその犠牲者である限りにおいてさえ——そしてそれが私から言葉を奪うとか、私から生存権を取り上げるとかいつかできるにせよできないにせよ——、それらはどのようにして私から情熱を知っているという誇りとか、私がその前でその前だけで望んでいる絶対的な謙遜とかを全く完全に無理やり取り上げるのだろうか。」(PI p.752)

つまりブルトンとしては第三者の承認によって翻弄されることがないように、言葉でもって象徴的次元を作り上げ、そこにおいて可能な限りの正当性を確保しようとするのであり、それに対してなら謙虚になれるということなのである。ここにおいて示される美なら美という概念が、例えば階層秩序的な二項対立を形成する一項となるはずの美ではないことは明らかだろう。ブルトンが美を定義することによって、シュルレアリスムが否定してきた二項対立に陥ることはあり得ない話である。だからこそブルトンは美を定義する際に、つまり「美に関してある態度がそこから必然的に生じる」(PI p.752)として、美を様々な形で表現していくわけであるが、その中で次のようにも書かれているのだ。「美、動的でもなく静的でもない。人間の心、地震計のように美しい。沈黙の王権…」(PI p.753)。

つまり美とは外部の世界にある何ものかということではなく、内面的に捉え得るものということなのである。ここに至ってブルトンは終着点に到達したと言えるのであろうが、そうだとも言えるしそうではないとも言える。というのもここにおいては主観性はどちらかと言えば抑制されているからである。全くないというわけではなく、象徴的次元に反映されていることも明らかなのであるが、ブルトンとしてはこれでいいという承認を得た上で、自分自身の主観性と戯れたいということなのである。つまり前提として欲望の充足があり、承認が得られていることが必要になる。既にそれは得られているのである。従ってそれは意味のないシニフィアンとの戯れであり、『マルタの鷹』で言えば永遠に手に入れることのない黒い鳥の歴史につ

いて語ることであり、ラカンの「〈盗まれた手紙〉のゼミナール」について言えば、内容のわからない手紙について思いを巡らせることである。事実ブルトンは『ナジャ』の「序言」において「主観性の最大の幸福——私にとって一層重要であり続ける——は間違いだらけの恋文や〈綴りのいい加減な官能本〉の中に存している。」(PI p.646)としている。それでは『ナジャ』においてその主観性の戯れと言えるものはあるのであろうか。『ナジャ』のテキスト全てあるいはその一部がそれに該当すると考えられるのであるが、ブルトンにしてみればそれはナジャの残した言葉であったと言えるだろう。ブルトンはナジャとの関わりを記した10月4日から12日までの記述の後、ナジャとのことを思いながら様々に書き記しているのであるが、その中に次のような記述がある。「私は最早、この数日間、私の前で発せられたり私の眼の前で彼女によって一気に書かれないいくつかの文、私が最もよく彼女の声の調子を見出しその響きが私の中で非常に大きくなったままの文しか、思い出したくないのだ。」(PI p.719)

これはブルトンのシュルレアリスムとしての活動の実績を背景に、ナジャによって欲望の対象とされていたという承認の上で、ブルトンがナジャの中にシュルレアリスム精神の具現化を見たことから明らかにされていると思われる。

終章

我々が『マルタの鷹』から受け取る教訓は、もっともそのようなものなど必要ではなく、我々はそれを楽しめばいいのだと考える立場もあって否定できないものであるが、たとえ明示されているというのではなくても小説の根底に流れていて、我々としては認めざるを得ないのであるが、それは現状肯定の思想であり、これが大衆小説として支持された『マルタの鷹』の成立の根拠となるのである。そして我々はこれに関連してラカンの言う欲動を想起することができる。ここにおいて問題になるのが欲望と欲動の違いであって、まず欲望について見るならば、既に指摘したように、欲望は他者の欲望を自らの欲望とすると同時に、自らを他者の欲望となることを求めるといった相互性が認められるのである。従ってある程度歯止めが利くというか、欲望が満たされないとなると諦めるということも起こり得る。ところが欲動とは諦めることなくひたすら目的に向かって進み続ける。そして当然の如く求めるものは得られないのであるから、失うものも多いはずである。欲動とは予め失われた対象を取り戻そうとする働きではありながらも、その失われた対象とは再び戻ってくることがないわけであるから、失敗することが運命付けられているのである。従って欲動とは失われた対象に近づくようでありながらも、目的を果たさず、再び欠けたところのある自分自身へと戻ってくる。そしてそれが失敗したからということで諦めるのではなく、何度も繰り返されることとなる。このことはその失われた対象が一時的に見失われたものというのではなく、あたかも根源的で本来的な高みにまで仕立て上げられることを意味する。だからこそ『ナジャ』においてブルトンはナジャの世界を次のように表現するのだ。「ナジャの世界であった世界、そして全てが非常に素早く上昇と落下の様相を呈していた世界のことを考えると、ほとんど別な風ではあり得なかったのだ。しかし私はそれを経験的に（下線原文）判断しているのであって別な風ではあり得なかったと言いつつも私は危険を冒しているのだ。私がどのような欲望を抱いたとしても、恐らくはまた幻想を抱

いたとしても、私は恐らく彼女が私に提示していたものと同一線上にはいなかったのだ。」(PI pp.735-736)

予め失うことが運命付けられているのであるから、別れに至ることも当然と思われるが、欲動の次元で言うなら、これはフロイトが『快樂原則の彼岸』の中で言及しているように、タナトスつまり死の欲動の問題なのである。フロイトによれば、タナトスこそ一次的な欲動であり、エロスは二次的なものであると言う。従って『ナジャ』においてブルトンが行なったことは、ラカンの言う「ものの殺害」といった象徴的な死の過程に至るものであり、ある種ナジャの殺害と言えるものである。それはナジャの物語の最後に端的に表わされていると言えるだろう。「それが詭弁であったとしても、少なくとも私が私自身に、最も遠くから私に会いにやって来ている人に、〈誰かいるのか〉という、常に悲壮な叫びを、あげることができたのはそれのおかげなのである。誰かいるのか。あなたなのか、ナジャ。彼岸 (下線原文)、全ての彼岸がこの世にあるというのは本当なのか。私はあなたの声が聞こえない。誰かいるのか。私一人なのか。私自身なのか。」(PI p.743)

ここにおいてブルトンはナジャを象徴的に殺害している。そしてこのことについてブルトンは自覚的であるのだが、それはナジャの喪失ということに限定されているかのようだ。というのも既に指摘したように、ブルトンは10月12日以降の記述において「何の追求なのか、私は知らない」(PI p.714)と書いているからであって、いずれ死に至る自分自身の存在は自覚しなくなかったようである。しかし『ナジャ』のまさに最後の美についての言及のところで、唐突に次のような記述が見られるのである。「ある朝の新聞は私に私の近況を報告するのに常に充分だろう。」(PI p.753)とあり、実際にあった飛行機の遭難事故の記事を書いているのである(PI pp.1563-1564)。しかしブルトンが「私の近況」と表現しているようにこれもまた死の欲動による「私自身の殺害」ということになる。このように考えるならば、ナジャとの関係も死の欲動へと至るエロスの欲望と考えられることになる。更にはナジャ以外の女性とのことも暗示的に示されているが、これもナジャの場合と同様に喪失へと至る象徴的な死の過程を繰り返していることになるだろう。しかし一方でブルトンはこのことを忘れていたり、この死の過程を先延ばしにしたいという欲望にも駆られていたわけで、それは希望ということなのである。「中絶の日付である、8月の終わりから、この物語が、興味深い感情の重み、今回は、精神というよりも心情といったものであるが、その重みにたわめられて、感情が激しくなるがままにしておくのは覚悟の上で私から離れる12月末まで、私はどうにかこうにか——人が生き得るように——それが守っている最良の希望、信じたい人は私を信じるだろうが、これらの希望のまさに実現、完全な実現、そうなのだありそうもない実現で生きたと考える方を選ぶのだ。」(PI p.746)

そしてナジャというナジャ自身が自分で選んだ名前も、ロシア語で希望という意味であり(PI p.686, p.1542)、ブルトンはナジャの名前を忘れることなく生き続けることになるのである。

注

- 1) 引用文等の後の括弧の中に示されている略記号は、以下の文献を示している。尚、引用文については全て筆者が訳出したものである。
- (PI) André BRETON, *Œuvres complètes I*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1988
Manifeste du surréalisme, 1924, pp.309-346
Nadja, 1928, pp.347-399
Second manifeste du surréalisme, 1930, pp.775-833
- (PIII) André BRETON, *Œuvres complètes III*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1999
La clé des champs, 1953, pp.651-948
- (MF) Dashiell HAMMETT, *The Maltese Falcon*, Vintage, 1992
- (CN) Dashiell HAMMETT, *Complete Novels*, New York: Library of America, 1999
- (DG) Jacques DERRIDA, *De la grammatologie*, collection critique, Minuit, 1967
- (LD) Jacques DERRIDA, *La dissémination*, Seuil, 1972
- (EII) Jacques LACAN, *Écrits II*, collection Points, Seuil, 1971
- (LH) Alexandre KOLÈVE, *Introduction à la lecture de Hegel*, collection TEL, Gallimard, 1947
- 2) 諏訪部浩一、『『マルタの鷹』講義』、研究社、2012年、p.7
- 3) Raymond CHANDLER, *Play back in Later novels and other writings*, The Library of America, 1995, p.861
- 4) 『『マルタの鷹』講義』、p.125、p.152、p.177
- 5) 『『マルタの鷹』講義』、pp.124-125
- 6) 『『マルタの鷹』講義』、pp.41-42